

(上の3枚) 釜石望鈴さんが撮影した被災地の風景。いずれも釜石さん提供



撮る。私とみんなのために



被災地のプレハブの前でカメラを持つ釜石望鈴さん＝岩手県大槌町

大槌の高1、笑顔取り戻した

人付き合いが苦手な、中学時代は一時、教室にも入れなかった岩手県大槌町の女子高生が、東日本大震災後の故郷の撮影を続けている。写真を通じて様々な人と出会おうちに積極的になり、今は「伝えたい」と意気込んでいる。

大槌町出身の高校1年生、釜石望鈴さん(15)。元々、穏やかな性格だったが、中2の秋ごろから、教室に入ろうとすると気分が悪くなり、保健室に登校していた。教室に戻りたいのに、戻れない。そんなとき、震災が起きた。自宅が高台なので難を逃れたが、家の前には一面のがれきりが広がった。「これは撮っておかないと」。持っていたデジカメで夢中でシャッターを切った。以来、自宅前の風景を毎月11日に撮影。倒壊した防潮堤など崩れた町の姿も写し続けている。

昨年11月、町内であった写真家による撮影の研修会に参加。食堂で働く女性や仮設住宅の子どもたちにレンズを向

けた。笑顔で撮影に応じる人たちは誰もが輝いて見え、気づくとあれこれ話すようになっていた。

会話することに自信を取り戻してきた8月、キャリア教育のNPO「カタリバ」(東京都杉並区)の今村久美代表理事(33)から、カンボジアへの研修旅行に誘われた。貧しいながら、明るく笑う人たちを撮影。ひたむきに生きる姿に心を打たれた。

「震災後、私は周囲に支えられて笑顔になれた。復興に向け、今度は私がみんなを笑顔にしたい」

いまは週2回、カタリバが町内に開設した塾で、手伝いをしていて、地元高校生らが町の課題を考え、解決する活動を後押しするプログラムがある。ゴミを拾ったり高齢者と交流したり。その様子を写真に収め、ブログで発信する。

「私の写真を見て、町のみんなが地元の復興に力を注ぐと思うてもらえたらうれしい」

(川見能人)